

結局は秦隸

澤田雅弘

Masahiro Sawada

子貢に謂ひて曰く、「なんぢと回といづれか愈れる」と。対へて曰く、「賜や何ぞ敢て回を望まん。回や一を聞きて以て十を知る。賜や一を聞きて以て二を知るのみ」と。子曰く、「如かざるなり。吾となんぢとは如かざるなり」と。

『論語』公治長のこの一段には、高校生のときに接した。「一を聞きて以て十を知る」のわずか五字が、顔回の聡明を余すところなく伝え、孔子の「如かざるなり。吾となんぢとは如かざるなり」（古注による）が、顔回到期待する孔子の心情を活写しているかに思え、鮮烈であった。

平成五年のノートには、この五字を半切にしようとした鉛筆でのラフがあり、その後にも幾度もこれを形式を変えて落書きしてある。中には「以」を除いた四字にしたものもある。筆で試し書きた記憶もあるし、その当時、漢数字が面白かったこともよく覚えている。「一二三四五六七八九十」と並べて正方形と半切の作にしたし、「人

一己百」も「五日一風」も仕上げた。ほかにも「一百千萬」「五日一風」「五風十雨」「一二の三」「一日三省」「三萬六千日夜当乗燭」などのラフもノートのあちらこちらに残っている。

学生のころ、隸書は筆画が多い方が治まりやすいと教わって、それに従ってみようとしたときもあるが、気持ちが悪かったことがない。それに引き換え、漢数字の無機質な簡素さは飽きない。それにのびのびと書ける気楽さや、紙面が明るくなる瞬間にも喜びがある。

今年には書作に充てる日を、夏に何とか四日確保し、部屋を取って楽しみながら、学生書展の賛助作四作を含む六点を仕上げた。「聞一以知十」は、その最終日、残すところ二時間を切ったときに、ふともう一作書いておこうと思つて選んだものである。この文言は学生展用には不向きだと後回しにしてきたが、いまなお新鮮な感銘が後押しした。十枚は書いていない。最初一枚は、むかし念頭にあった調子に引きずられて妍媚になった。その非を悟つて一二枚書

いた。それから次で上げると言い聞かせて数枚書いた。出来たと思
つて、迷わず筆を洗った。乾いたそれを掛けてみた。十が少し弱い
かなとも思ったが、気に入っている。

*

『周易』坤の文言伝「君子は敬以て内を直くし、義以て外を方に
す」から。「六二の動は、直方大なり」の解釈の一句で、「君子」の
二字を敢て外して経書臭を軽減し普遍化した。

学生時代、入学学科のカリキュラムから自然に経書は齧った。経
書の読書歴を思い返すのは、かれこれ三十年ぶりかと思う。論語・

孟子はそれぞれ集注本で学部一年に。礼記は二年に大学と中庸の各
集注本で読み、三年では礼記のゼミを選んで注疏本を読んだ。大学
院の授業は周礼・左氏伝は注疏、公羊伝は義疏、尚書は正義であつ
た。周礼はなんとなく肌があつて、五年間続けた。孝経は畏友と二
人で学部生時代に注疏本で読了した。儀礼は周礼を読むときに常時
参照していたし、穀梁伝も公羊伝・左氏伝のみに常時対照しなが
ら読んだ。ただ周易・詩経・爾雅は、出典の探索を除いては手にし
なかつた。しかし、易と詩は読んでおかなければと己に課して、幾
度か訳注を手にしたが、いまもって好みではない。

ただ易については、わたしが学部二年の夏、師がふと口にされた
「易にはなかなかいい言葉がある」の一言が耳に残って、時折、訳

注を繰ってみることがある。この「敬以直内」も、たまたま自宅の
棚から出して数分その場で立ち読みしたときに知った。敬・直・内
は経書常用の概念だし、とりたてて心に響かなかつたが、ただ手垢
が着いていないところが新鮮に思えた。内容も学生に向けて書くに
はいいと思って、ノートに写したばかりのものである。

もう少し書けると思ったが、予想以上に苦戦した。十枚、多くて
二十枚と自制したが、それでは済まなかつた。途中で反省し楽に書
いたものも一枚残したが、両者ともに気に沿わないところがあつて、
後日見比べて悩んだが、これにした。

*

四日の内には、昨年に書かなかつた行草も二点仕上げた。里耶秦
牘の伸びやかな風に倣つてみたいとの昨年来の思いは、それに適う
ことばを得られず、結局、昨年とあまり代わり映えしない調子にな
つたものが多い。

両作とも、墨は例によって呉竹の「抱雲」磨墨液。紙は昨年から
使い出した台湾画仙の「厚口金龍」。筆は「聞一以知十」が善璉湖
の「滄海」の大。三十年か三十五年ほど前に買った長鋒気味の羊毫。
「敬以直内」の方は邵芝巖の無銘で2.2×11.8cmの羊毫。こちらは九年
前に現地で購入した。

(二〇一六・一〇・一)



34 × 34cm

聞一以知十



68×68cm

敬以直内